

和歌：文苑

著者	?本, 植, 杉山, 富槌, 下山, 陸治, 本田, 弘, 中内, 義一, 石橋, 愛太郎, 宇野, 哲人, 古賀, 憲, 吉丸, 一昌, 八波, 則吉, 川村, 章夫, 讀人しらず, 松露生, 江楠生, 蝶々子, 溪川生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 3
ページ	6 8 - 7 1
発行年	1896-02-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/4791

も清く直く高く秀づる。さながらこの山のごとなればこの山の姿や。即てこの皇國の人のいきうつしとまもいはんかし。これは只この皇國にのみ山なれば日本の山と名を負せんも。そら言にはあらずなむ。

この文は余が五靈略説といふ文の一節を抜出でたるなりことしの勅題に因みてこゝにうゝ

寄山祝

助教授 黒本植

おのれ、ここの勅題を、よみ奉らん、さおもひけるほさに、ふさが、島にものして、むつきの二日の日、きりしま山のほこりを過ぐ。ここのけふしも、この名山をみるこそよ、そ神代をわけて、今の大神代をおもひて、村山の梢を隔て、仰ぎみれば、いよく高く、ますく尊さく、かんと奉りければ、よめる。

神代よりかけすくつれぬ高千穂のたかねなからの君か御代うな

全 杉山富樫

雲凌くふしの高峰の姿にそ動かぬ御代のまるとは見る

全 下山陸治

とこしへに動かぬ不二の高根こそ我大君の國のこはしら

全 本田弘

ふたつなき不二の高根の姿こそ我すめくはの姿なるらめ

全 中内義一

動きなき不二の高根は幾千代もかはらぬ御代のためしなりけり

全

石橋愛太郎

柴の戸をれしあけ方の高根こそ豊けき御代の姿なるらん

久方の天のかく山かくはしく榮ゆく國のきこか大御代

全

宇野哲人

よるつ世も更にゆるかぬ岩くらの山こそ御代の姿なりけれ

全

古賀憲

動きなき富士の高根に君か代の深き恵の雪そつもれる

常盤山松の緑のいろかへぬ君か御代こそ樂しかりけれ

全

吉丸一昌

富士の降の八重棚雲をおし分けてたてるや御代の姿なるらん

全

八波則吉

動きなき御代の姿を人間は、不二の高根とさえて答へむ

千代八千代動かぬ御代の礎とほきてそ仰く高千穂の峯

全

川村章夫

いや高き御稜威を峰に四方の國凌きて立てる富士の神山

恭賦新年勅題

杉山富樫

和風送暖自千里。昇平滿目祥雲起。千秋雪白高芙蓉。春光到遍玉容美。晴空突兀姿自雄。

霞抹大麓淑氣冲。萬邦儼乎攝高格。瑞日吐光仰望崇。東海居然爲巨鎮。秀靈無双何處有。人民豐樂帝基隆。草木欣榮君德厚。偉哉威稜如日昇。神州文運勃然興。今朝迎春祝聖壽。綠色皎潔萬象激。

知己難

讀人 玄ら 予

あさか山淺くそ我はたのみつる底さへ見ゆる人の心を

初 雪

松 露 生

昨日まで寂まかりける吾宿のけさうるはしき雪の花園

藤堂陳人評 昨日さけさと相對しきひしき花うのこ相對す章法井然

まくれせし里の寒さを知られけるみ山につもるけさの初雪

全評 來を見て往を思ふ時雨るたに寒き里の雪にさちらるゝいかにかり寒からんの意言外にあり

六十の賀を祝ひて

今年より千歳の坂をつく杖の數も知られす年やへぬらん

壽 賀

江 楠 生

つとひ來てことほく人の齡をもかけてそ千代の在數にせん

競漕を見てよめる

江津のうみのなみなみならぬますらをのみるもゆゝしきほふ友舟

殘 雪

蝶 々 子

今更に消ゆるををしき我宿のみちをへたてし去年の白雪

初 鴉

きうしと思ひし野邊のからすさへけさはゆかしき春の初聲

霰

八 波 則 吉

ありかたき御代の惠の厚衾かさねて夜半の霰きくかな

稼堂陳人評 白川樂翁公の歌と共に傳ふべし

遠山雪

肌寒みねやの戸押して眺むれかうへ遠山に雪は降りけり

全評 骨格古に逼る

寒稽古に出つる朝よめる

世の爲めに盡すつとめ稽古なり朝霜かけて身をや鍛はん

全評 猛心権表に溢る

雪の朝讀める

溪 川 生

今朝みれば夜半の嵐の龍田山小松かうへに淡雪を降る

後撰百人一首評釋

禾の舍あるじ

世に後撰百人一首と云ふものを傳ふ其開卷に建武の乱より君臣上下こゝろを
るに九重を出で都近き知るべの方へ退き給ひける中に後普光院攝政殿下(良基)は